

新しい学問－医学の発展に貢献した人々－

1 目標

杉田玄白らが『解体新書』を著すきっかけとなった解剖の様子を知り、実際の執刀者である「老人」の姿を通して、差別されていた人々が、労働を通してすぐれた知識と技術を持ち、当時の医学の発展に貢献したことに気づく。

2 展開

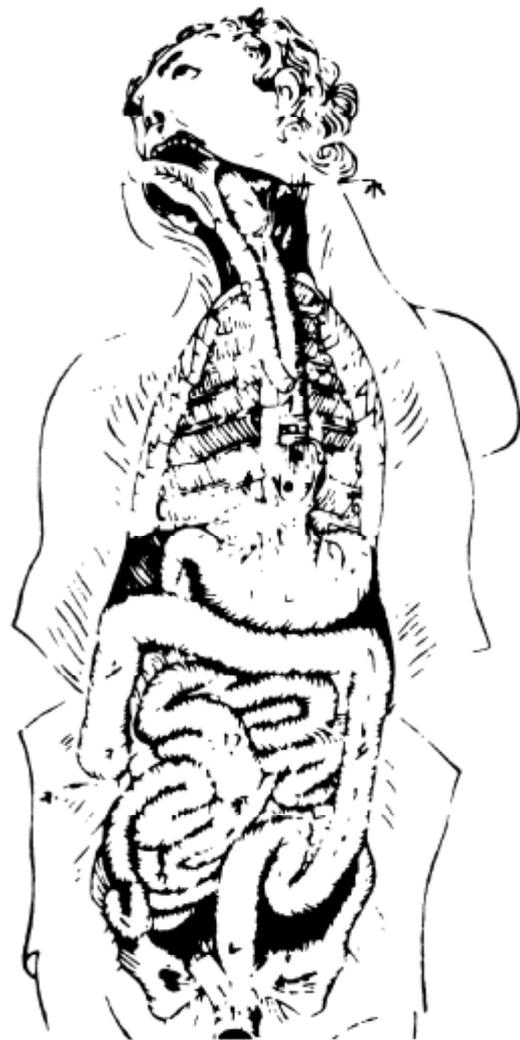
主な学習活動	留意点
<p>1 2つの人体図を比べて気のついたことを話し合う。</p> <p>2 資料3の絵を見て話し合う。 ・杉田玄白はどの人だろう。 ・刃物を持っている老人は何をしているのだろう。</p> <div data-bbox="236 1189 783 1285" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>杉田玄白たちはどうして自分で腑分けをしなかったのだろう。</p> </div> <p>・玄白たちは老人をどのように評価していたのか考える。</p> <p>3 資料5「腑分けの一節」を読み、この老人はどうしてこのような技術や知識をもっていたのかを考える。</p> <div data-bbox="236 1525 788 1615" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>玄白たちは、どんな気持ちで見ているのだろうか。</p> </div> <p>4 まとめ(感想発表)</p>	<p>資料1 「東医宝鑑」の人体図(P12) 今まではこのような人体図で医者は患者を診ていたことを伝える。</p> <p>資料2 「ターヘルアナトミア」の人体図(P12)</p> <p>資料3 「腑分けに立ち会った絵」(巻末資料13)</p> <p>資料4 ワークシート(P13) ・吹き出しにことばを入れてみよう。 ・ここまで「解体新書」を著した杉田玄白らについて簡単に触れておくことが必要である。 ・腑分けについて。 授業で習ったことをもとに考えさせる。 ・死へのおそれ。 ・すぐれた解剖技術を持ち合わせていない。玄白が老人をどう評価していたか考えさせ、発表させる。</p> <p>資料5 「腑分けの一節」(P14) ・死牛馬処理の中で、腑分けの技術を獲得したこと、内蔵配置の知識を得たことなどを伝える。 ・老人の持っていた技術に対する玄白たちの気持ちを考えさせ、発表させる。</p> <p>資料4 ワークシート(P13)</p>

資料1 「東医宝鑑」の人体図



東医宝鑑の人体図
「朝鮮漢方医学書」より

資料2 「ターヘルアナトミア」の人体図



ターヘルアナトミアの人体図
「解体新書」より

トピック：医学に関わった被差別民

「藤内」とよばれ差別された人々が近世の北陸地域におり、火葬・施薬・灯心製造・草履製造などに携わっていた。中には「藤内医者」の言葉のように、医療関係に携わる人々がいたことが知られていて、男は医者・女は産婆となっている。この「藤内」の他に、島根県の「鉢屋」の中にも産婆を行うものがいたといわれているし、土佐藩でも、「穢多」身分の医者が調薬や治療を行っていたこと、近江の国でも多くの医者がいて、一般の村に比べて三倍もの医者がいたことがわかっている。被差別部落に医療に携わる人々が多かったのは、「生・病・死」といった領域を差別された人々が生業としていたことと関連性があると考えられている。

【参考】網野善彦 『『日本』とは何か』 2000 講談社

小林茂・芳賀登他監修 『部落史用語辞典』 1985 柏書房

斎藤洋一 「近世被差別民と医薬業・再考」 部落解放・人権研究所 『部落解放研究 153』 2003 解放出版社

山本 大 他編 憲章簿第5巻 1985 高知県立図書館

資料4 ワークシート

解体新書 - 「腑分け」の図 -

()年 名前()



<感想>

腑分けの名手

1771年の春のことでした。わたしは、オランダ語で書かれた『ターヘルアナムミア』という医学書を手に入れることができました。わたしはもちろん1文字も読むことはできなかったのですが、図にかかれています、内臓、骨格のぐあいなどが、今まで見たり聞いたりしたものとはたいへんちがっていましたので、これは1度、身体の内臓を実際に見てみたいものだと思います。

すると、奉行所より、「明朝、骨が原にて腑分けを行うので、希望があればおいでください。」との知らせを受け取りました。わたしは、翌朝、友人である前野良沢、中川淳庵をさそい、ともに骨が原に向かうことになったのです。

さて、腑分けのことは、虎松というものがすぐれていると聞いたので、たのんでおいたところ、その日はあいにく急病で、代わりにその祖父である90歳ぐらいの老人が腑分けを行うことになりました。とても元気な老人で、若いときから腑分けを何度か行ったと話してくれました。

その日も、老人は、あれこれと指し示しては、「これは心臓でございます。そしてこれは、肝臓、これは胃であります。」などと説明してくれました。また、「これは、名前は知りませんが、自分は若い頃から数体を手がけておりましたところ、これは必ずこの場所にあります。」などと言ってわたしたちに示してくれました。

わたしたちは、手に持っていたオランダの解剖書とてらしあわせてみたところ、一つとしてその図とちがっているものはなく、まったく同じであることにおどろきました。

翻訳の決意

帰り道、わたしは前野良沢や中川淳庵と語りあいました。

「今日の腑分けは本当におどろくことばかりであった。かりにも医者をして仕事としているものが、その医学の基本である人体の本当の姿を知らずにいたことはたいへん面目ないことである。この『ターヘルアナムミア』を少しでも翻訳することができたならば、きっと身体の内外的ことが多くの人にはっきりとわかって、治療に役立てることができるであろう。なんとかしてこれを翻訳したいものである。」

わたしのことばに2人とも「まったく同感である。」と言い、さっそく3人で翻訳の作業にとりかかることになりました。